異世界の本屋さんへようこそ！2

登場人物紹介
Main Characters

カルドゥ
突然、本屋にやって来る
年齢不詳の派手な男。
蓮に絵の描き方を教えた
ことで、「師匠」と呼ばれる。

ラーゼス
カルドゥの従者兼目付け役。
冷静沈着で、いつも
カルドゥに呆れながら
ツッコミを入れている。

ミカジ
魔槍の使い手である、
金髪碧眼の美人。
姉御肌で、女性には優しく
男には容赦がない。

ジャストワ
心配性で過保護な魔術師。
常に肩に小さなカエルを
一匹のせている。

リヒト
アウラ・エル国立大図書館
の司書長。嘘がつけない、
無愛想な堅物。
女性が少し苦手。

ジョー
子供の雷竜。
「じょー」と鳴く。

マチガエル
蓮に懐くカエル。
ある能力を秘めて
いるらしいが……

ルーエン・ディー
蓮に本屋を作ることを依頼した、
アウラ・エル国の国王。
蓮の面倒をみてくれる超美形。

相葉蓮（あいばれん）
ある本がきっかけで突然異世界
トリップした、本を愛する書店員。
中性的な顔や男っぽい言葉づかい
から、よく男性に間違われる。
いまは、異世界で本屋の文化を
広めるために奮闘中!

目次

プロローグ　7
第一章　本屋さんの日常とおかしな客人　30
第二章　イベント準備で大忙し　105
第三章　お祭り開催！　204
エピローグ　294

プロローグ

「いらっしゃいませー」

異世界でも、書店の平日の午後は空く。

地球から遠く離れた、無限銀河三系〈白騎士の星〉。

ここは十五小国に分かれたアウラ・エルの国の一つで、青緑の一の国という。首都パウラ・フォウにはこのアウラ・エルで唯一の本屋があり、看板にはこう書かれている。

『白騎士の本屋さん』

地球生まれ・地球育ちの書店員、相葉蓮の目下の職場だ。

蓮の実家は創業八〇年の老舗の本屋で、物心がつく前から本に囲まれて暮らしていた。幼い頃から年の離れた二人の兄たちのあとを追いかけて育ったため、言葉づかいや態度が男っぽい。それに女性にしては背が高い方で、髪も短く胸も小さいため、二十一歳になったいまでも男性と間違われることがある（もう慣れてしまって、いちいち訂正する気も失せた）。

「こんにちは、いらっしゃいませ！　ご用の際はスタッフまでお声がけください」

通りすがりに足を止めて、物珍しそうに入店してきた客に明るく挨拶しながら、蓮は品出しの準

備に取りかかった。
なぜ生粋の地球人である蓮が、異世界の本屋の店員として奮闘しているかというと、ちょっと普通では考えられないくらいの、とても不思議な巡り合わせによる。
蓮がこの異世界にやってきてから肌身離さず持ち歩いている、深紅の革表紙の小さな本。
本の表紙には金色の文字でこう書かれている。
〈白騎士の書〉
このいわくつきの本が、蓮を異世界へ導いたのだ。
蓮が実家の本屋に届いたこの本をなにげなく開いたところ、いきなり白い閃光が溢れた。気がつけば、そこはもう宇宙空間を走る列車の中だった。
そこで出会った喋る羊車掌に告げられた言葉は、いまでも忘れられない。
『ひとまず〈白騎士の星〉へお行きなさい。そこでよき出会いがあれば、きっと帰りたい場所へ帰れますよ』
そのセリフをうのみにしたわけではないけれど、流されるように船列車なる大型帆船の形をした列車に乗って銀河を横断し、異世界――この〈白騎士の星〉へと辿り着いた。
すぐにでも地球へ帰りたい蓮だったが、そのためにはこの星の一部になる必要があると教えられた。この星で生活をし、住人たちと親しくなれば、地球に帰る船列車の切符が得られる――そういうことなら、まずはこの星で自分の居場所を得ようと蓮は覚悟を決めたのだ。
でも実際にはどうすればいい？　と途方に暮れる蓮に助け船を出してくれたのは、この世界で最初に出会った美貌の青年、ルーエン・ディーだった。
『あなたの手で本屋を作ってほしい』
突然の申し出に驚いたけれど、聞けばこの世界には本屋がないという。
本を愛するいち書店員としては黙って見過ごせるわけもなく、蓮は『やります』と答えた。
ここで本屋を作り、一生懸命働いて、星の一部と認められるよう住人たちと仲よくなりたい。
そしていつか地球の家族のもとに帰る――そんな目標を胸に、蓮の新しい生活が始まった。
幸運にも出会いに恵まれて、ルーエン・ディーだけでなくジャストワ、ミカジ、リヒトという大切な仲間を得ることができた。彼らの協力のもと、小人族や図書館の司書たちの力を借りて、この世界ではじめての本屋を開くことになったのだ。
蓮は、会計を済ませた顔なじみの年配の女性客へお辞儀した。
「いつもご利用ありがとうございます。わあ、今日もすてきなお召しものですね」
女性客は蓮の方をちらりと見て、にっこり微笑んだ。
「そうかしら？　ちょっと年甲斐もなく派手じゃない？」
「いいえ、明るい赤がよくお似合いです」
「あら、ありがとう。また本を頼みに来るわね」
「はい、お待ちしております！　どうぞお気をつけてお帰りください」
蓮は扉を開けて、淑やかに歩いて出ていく女性客を見送った。
午後のこの時間帯は、朝や夕方の混雑時に比べるとお客の数がぐんと減る。大人は仕事、子供は

学校に行っているからだ。
この合間に店内の整頓、商品の品出しをスタッフが交代で行う。他にも、在庫管理や、フェアの企画、新刊本の発注など細かな仕事は尽きない。
毎日同じことの繰り返しのようで少しずつ違う、地味だけど堅実な作業の積み重ねが売り場を常に新鮮に見せる秘訣だと、蓮は考えている。
蓮がレジ回りを片づけていると、ふらりと現れたご近所さんの男性に声をかけられた。
「忙しそうだね、レンさん。なにか面白そうな本は入ったかい？」
「いらっしゃいませ、こんにちは！　ちょうどよかった、新刊でおすすめできそうな本が入荷したんですよ。これです、ごらんになりますか」
「見るだけね。いま財布を持ってきてないから、気に入ったらあとでもう一度来るよ」
「了解です。お買い求めになるのでしたら取り置きしておきますので、またお声がけください」
「うん。仕事中、邪魔して悪かったね。レンさんはいつも明るいから、特に用がないときでもつい話しかけてしまうんだよなぁ」
「あはは、光栄です。元気だけが取り柄なので、私でよければいつでもお相手いたしますよ」
からりと笑った蓮に、ご近所さんも屈託のない笑顔を返してくれた。
蓮が異世界で暮らすようになったのは、いまから七十五日前のこと。ここでは、地球と異なり一日が二十七時間だ。しかも二〇日で一ヶ月、十五ヶ月で一年と数える。
緑が眩しかった時期は終わりを告げて、木々が紅葉し、実り豊かな季節を迎えている。

蓮は、制服の胸ポケットをそっと押さえた。そこにあるのは、この星へ来るきっかけとなった〈白騎士の書〉だ。
これは、その昔、この世界が危機に陥ったとき国を救った〈白騎士〉の力が封じられている特別な本らしい。
ただし、この本を開くことができるのは〈白騎士〉本人のみだという。伝承によれば〈白騎士の書〉が再び開かれるとき転生した〈白騎士〉が、再び世界を救う——らしいのだが、本を開くことはできるものの、蓮にはいま一つその実感がない。
本の中身はほぼ白紙だが、本来は〈白騎士〉の力が言葉となって収められるそうだ。蓮がそうとは知らずに唱えたおまじないで一ページが埋まったのは記憶に新しい。
遠い昔、『誰か』に教えてもらった、たくさんのおまじない。
その『誰か』が誰なのか……思い出せないのだけれど、その人物に、おまじないは『特別な言葉』だから、いたずらに口にしてはいけないと教えられた。
世界中の友達から力を貸してもらう——おまじない。
それがまさか、異世界の本と関わりのある言葉かもしれないだなんて、思いもよらなかった。
空白だったページにおまじないが文字として刻まれたことを確認したとき、ふと疑問が浮かんだ。
……もしかしたら、私の知っている他のおまじないも〈白騎士の書〉の空白を埋める、かもしれない……？
その可能性はあるけれど、なんだか結果を知るのが怖くて試せずにいる。

つらつらとそんなことを考えながら、蓮はポケットから〈白騎士の書〉を取り出して呟いた。
「……思えば不思議な巡り合わせだよなぁ」
この世界に来たばかりの頃は、地球の家族のもとに帰ることで頭がいっぱいだった。
だけど仲間たちと忙しくも充実した毎日を過ごすうちに、だんだんこの世界が好きになった。
その結果、地球に帰るための船列車の切符を手に入れることができたけれど、悩んだ末に蓮が選んだ道は、この世界で本屋を続けることだった。
いまは地球の家族にも手紙で無事を知らせ、たまに近況報告などしつつ、仕事漬けの日々を送っている。
「そんなにじっと見つめて、〈白騎士の書〉がどうかした？」
女らしい甘い声で訊ねてきたのはミカジだ。
店のスタッフでもあり魔槍の名手である彼女は、〈白騎士の書〉の所有者である蓮を護衛するのが務めだと言って憚らない。なんとも頼もしい仲間である。
ウェーブのかかった長い金髪を高く結い上げて背に流し、気の強そうな碧眼は生き生きと輝いている。稀に見る美女で、スレンダーなのに胸も腰も豊かな悩殺ボディは同性としてちょっぴり羨ましい。
「いえ、なんでも。少し浸っていただけです」
蓮は〈白騎士の書〉を制服のポケットに戻す。
するとミカジが書類を挟んだ木製のクリップボードを脇に抱え、しなやかな身のこなしでレジカウンターに入って来た。
「実用書の在庫チェックが終わったから、レジ代わるわ。レンは品出しがまだあるでしょ？　続きやっちゃって」
「ありがとうございます。じゃあ、お願いします」
ミカジは男性には手厳しく、子供や女性にはおおらかな性格で、蓮にはことのほか親切だ。自分の意見をはっきりと口に出してくれる快活さが好ましく、蓮は公私共に頼りにしていた。
「レン、追加注文分の検品が終わりましたよ」
そう言って会話に加わってきたのは、魔術師ジャストワだ。
科学の恩恵で快適な日々を送ってきた蓮にとっては、非常識で理解し難い力である『魔法』――これを使う彼もスタッフの一員で、異世界で途方に暮れていた蓮を助けてくれた恩人の一人である。
やや心配性で過保護であるものの、ジャストワは面倒見のいい人だ。蓮がこちらの世界に早く馴染めるようにと道案内役を買って出てくれたり、この国のことや生活面の常識などを教えてくれたりした。
ジャストワが手に持っていた数冊の本を客注処理用の箱に入れる。
「これが客注分です。品出し分はブックトラックに並べましたから見てください」
そう言ってジャストワは、本棚の近くにあるブックトラック――キャスター付きの動く整理用棚――を指差す。ちなみに客注とは、店に在庫がない本をお客が注文して取り寄せた本のことで、彼はさきほどからその客注分の本の検品をしていた。

蓮は頷いて答えた。
「ありがとうございます。品出しは私がするので、ジャストワは休憩に入ってください」
ジャストワは本屋の白い制服がよく似合う、すらりとした長身の知的な美形だ。サラサラの銀髪を一つに束ねて胸元に垂らし、賢そうな深い青の瞳に眼鏡をかけている。そして左肩には常時ヨミガエルという名の小さなカエルをのせていた。
蓮も最初は驚いたが、この世界では色々特殊な力を持ったカエルが生活の一部として使われている。なんでもヨミガエルは『自分以外の死者を一度だけ甦らせる』ことができるカエルらしい。それこそ小説の中の話のようだ。
ジャストワが店内のお客の流れを気にかけながら言う。
「これから休憩に入っても大丈夫ですか？」
「いまは空いてますから大丈夫ですよ。それに、もうそろそろリヒトが来る頃です。ああ、噂をすれば――」
人当たりの悪そうな空気を漂わせつつ、店に入ってきたのはリヒトだ。
彼はアウラ・エル国立大図書館の司書長を務めながら、この店のスタッフとして一緒に働いている。
「おはようございます」
「おはようございます」
彼は真面目で正義感が強い一方、ぶっきらぼうで無愛想なところがあり、目下その短所を改善中

だ。そんな堅物のリヒトだが、それなりに見栄えはいい。精悍な顔立ちをしていて、灰色に光る眼は意思の強さを秘めている。灰色の髪はいつも短く整えていて、清潔そうな雰囲気だ。
リヒトは豊富な本の知識を生かし、品揃えや人気商品の発掘など売り場の活性化に努めている。他にも力仕事や高所の仕事を率先して引き受けてくれるので、とても助かっている。
しばらくして、白い制服とリーフグリーンのエプロンに着替えたリヒトが、蓮のもとにやってきた。
「連絡事項は？」
「特にないよ。っと、そうだ、今夜が夕食会だってことは忘れてないよね？」
「ああ。仕事が終わったらそのまま直行だろ。俺、手ぶらだけど、いいのか」
「いいんじゃないかな、そんな気を遣わなくても。集まるのは仲間内だけだし」
「わかった。じゃあ俺も仕事にかかるぞ」
「ちょーっと待った、リヒト。笑顔を忘れてる」
蓮が指摘すると、リヒトは下がっていた口角をおもむろに持ち上げた。
「……どうだ？」
「……口元がピクピクして頬がひきつって眼はちっとも笑っていないけど、努力は認めよう」
そこへミカジが呆れたように鋭い突っ込みを入れる。
「バカ言わないで。そのどこが笑顔よ、ただの顔面凶器じゃないの。もっとましな表情しなさいよ。そんな不気味な顔で『いらっしゃいませー』なんて言おうものなら、女の子は確実に逃げ出すわ」

「くっ……」
「悔しかったら、ちゃんと爽やかに笑いなさいよ。ほら、こっち向いて」
リヒトは己の短所をよくわかっていて、接客に臨む以上、少しでも愛想をよくしようと努力していた。ただ、もともと女性が苦手なこともあり、ミカジの指導を受けるのもどこか腰が引けている。その上、早四ヶ月にもなろうという付き合いの蓮のことをいまだに男性と誤解していた。
「えーと……頑張れ」
そうリヒトに声援を送った蓮は、ジャストワへ休憩するよう伝えてから品出しの準備に取りかかった。
いまのところ店の運営は順調だ。
皆の努力の甲斐あって『白騎士の本屋さん』も徐々に周囲に認知されつつある。
「でも現状で満足していちゃダメだ。改善できるところは改善していかないと」
蓮が自分に活を入れていると、店に冴えない風体の男性客が入って来た。
ボサボサ頭に顔の上半分が隠れるほど前髪が長く、地味な群青色の服を着ている。その青年はほぼ毎日この時間に店を訪れるので、蓮はよく覚えていた。
「いらっしゃいませ、こんにちは。どうぞごゆっくり店内をごらんください」
「……」
蓮が明るく声をかけると、青年は頭をクシャクシャ掻きながら文芸書コーナーへと向かった。
続いてやってきたのは、ブロンズの作業着姿で作業帽を被った筋肉ムキムキの巨漢だ。眼光が鋭

いため、眼が合うと威嚇されている気分になるのだが、見た目に反して愛読書は児童書だ。
「よ」
男性客の名前はタズマ。彼は作業場スペースにいた蓮を見つけると、まっすぐに向かってきて歯を見せてニヤッと笑う。
「どーも、店長さん。一昨日あんたにすすめられた本、読み終わったから来たぜー。またなんかいいの、見繕ってくれよ」
「かしこまりました。それで、今回の本はいかがでした？」
「あー、まあまあかなー。泣けたし、面白かったんだけどよ、最後が湿っぽくていけねぇや。次はもっと熱くて明るいのが読みてぇ」
「なるほど。熱くて明るいもの、ですか」
蓮はちょっと考え、頭の中で該当作品を洗った。
「下剋上を果たす戦記ものなんてどうでしょう」
「面白いか？」
「私は夢中で読みました」
タズマはこの店ができるまでろくに本を読んだことがなく、本は読みたいが選び方がわからないと蓮に声をかけてきた。
そのとき蓮がすすめたのが、一般の文芸書より若干文字が大きく読みやすい児童書だった。大人も楽しめる血湧き肉躍る冒険活劇で、翌日『徹夜で読んだ！　面白かった』と興奮気味に店にやってきた。
以来、一冊読み終えては新たな本を買いに来る。蓮はそのつど感想を聞き、一緒に次の本を選んでいた。今日は草原を舞台に戦う騎馬の民の物語をすすめた。
「よーし。じゃ、これにすっかな。ありがとよ、読み終わったらまた来るわ」
「はい、ぜひ。感想、楽しみにしていますから」
「おう。しっかし、本って読んでみるもんだよなー。最初はただの退屈しのぎだったのに、いまじゃ手元に読む本がなかったら夜も寝られねぇの。いつの間にか習慣になっちまった」
「いいことです。読書は人生の栄養剤ですから、たっぷりと補給して英気を養ってください」
「うまいこと言うじゃねぇか」
「本当のことですから」
更に蓮は続ける。
「タズマ様のように本に縁のなかった方にこそ、本の魅力を知っていただきたいです。本を身近なものとして楽しんでもらえるお手伝いができれば、書店員冥利に尽きるというものです」
「お、おお？　なんだかかっこいいな」
蓮はニヤリ――ではなく、にっこりと笑って言った。
「というわけで、タズマ様にはまだまだ読んでいただきたい本が山ほどあるので、今後ともよろしくお願いします！」
「おう！　こっちこそよろしくな！」

威勢よく返事してタズマは会計を済ませ、片手を上げて帰っていった。
蓮が彼の後ろ姿を見送っていると、隣にいたミカジに肘で脇腹を突かれた。
「ニヤニヤして」
「ニ、ニヤニヤなんか……ちょっとしか、してませんよ」
だって嬉しい。本をあんなに好きになってもらえるなんて。
妙に高揚した気分で、蓮は品出しをするため軍手を掴んだ。
「フロアに出ます」
「はい、はーい」
店内には数名のお客がいるが、皆静かに立ち読みしている。
中には肩を震わせ、忍び笑いを漏らしている高齢のご婦人までいて微笑ましい。
三度のご飯より本が好きだと自負する身としては、ページを捲る指先や文字を追う眼が優しいとそれだけで親近感を抱いてしまう。
「いらっしゃいませー」
声をかけながら、どんな本が立ち読みされているのかな、とこっそり眺める。お客の関心を常に把握しておくことも書店員としての大事な仕事の一つだ。
不意に店内に外からの風が流れ込んだ。現れたのは、財布を手に持ったご近所さんだ。
「おーいレンさん。さっき取り置きを頼んだ本、買いに来たよー」
「いらっしゃいませ。さっそくいらしてくださったんですね、ありがとうございます！」

こうやって少しずつ、顔見知りが増えていく。
それが、日常の中に生活の一部として本が存在すること、できるだけ多くの人に本に興味を持ってもらうことに繋がっていく。
本で幸福を届けたい——そのために書店員としてできることを、やるだけやるのだ。
「こんにちはー。なにかご用の際はお気軽にスタッフまでお申し付けください」
蓮が周囲に声をかけながら、品出し分の本を抱えて文芸書コーナーに行く。すると、さきほどのボサボサ頭の青年がいた。ノンフィクションの棚の前に立ち、魅了されたように熱心に本の背表紙を眺めている。
ここの品出しは後回しにしようと蓮が踵を返そうとしたところ、話しかけられた。
「……あの」
「はい」
青年は蓮をじっと見つめて小さく囁いた。
「……やっぱり、かわいい」
「は？」
「……これ、ください」
「あ、はい、ありがとうございます。お預かりします」
蓮は差し出された本を受け取り、「どうぞ」とレジカウンターに促した。つい書名を確認してしまうのは書店員の癖だ。

青年が選んだのは『聖山の不思議な生きもの』という本で、蓮も読んだことがある。聖山と呼ばれる山に棲む珍しい生物を紹介したもので、蓮の想像力を遥かに凌駕する不思議な生きものたちとグロテスクな挿絵が印象的だった。

蓮が本にカバーをかけていたそのとき、ふっとなにかを思い出しかけて手が止まった。

「……あれ？」

いま一瞬、白い霧に包まれた山が見えたような気がした。

「……どうかしましたか？」

急に動かなくなった蓮を、青年が気懸かりそうに見つめている。

「すみません、失礼しました。なんでもないです」

蓮は慌てて本にカバーをかけた。

白昼夢だろうか？　それとも前世と言われる〈白騎士〉の記憶の断片？

でもすぐに消えたし、気のせいかもしれない。と、蓮は意識を切り替えた。

「商品はこちらになります。ありがとうございました」

代金を受け取り、本を手渡す。彼は買った本を身体に斜めがけにしていた布鞄にしまうと、片手をスッと出した。蓮はその手を軽く握る。

「またどうぞお越しくださいませ」

「……その笑顔、反則。いや、なんでも……」

青年はうっすらと眼元を赤らめると、もう片方の手で蓮の手をそっと包み、口元をゆるめて帰っていった。

はじめに握手を要求されたときは驚いたものの、地球で働いていたときも握手を求めてくるお客がいたので、いまでは慣れてしまった。

品出しに戻ろうとした蓮は、いつの間に来たのか、レジの近くに立っているルーエン・ディーと眼が合った。

「……やあ」

ルーエン・ディーは容姿端麗を絵に描いたような美しい男だ。柔らかい髪と切れ長の瞳は深い夜の闇を映したように黒く、すっと通った鼻筋、薄い唇、整った眉、どれも完璧だ。背は高く、身体つきは細身だが筋肉質で、なにを着ても様になる。彼は服も靴も宝石も黒しか身につけないが、おそらくどんな色でも似合うだろう。

「ルーエン・ディー。……いつからそこに？」

「少し前から、あなたを見ていたよ」

この外見に加え、男の色気と危険な匂いも備えているのだから、空恐ろしい。

蓮はこれまで生理的に美形が苦手だったのだが、ルーエン・ディーを筆頭に美男美女の仲間たちに囲まれて仕事をするうちに、だんだん耐性ができてきた。

人間慣れだと、つくづく思う。

はじめの頃はルーエン・ディーに近寄られると思わず逃げ腰になったものだが、最近ではそんなことも減り、普通に会話を交わせるようになっていた。

それでも時々こんな具合に彼が醸し出す雰囲気にのまれてしまう。
「レン」
「はい」
「いまのは誰？　あなたの知り合い？」
なんだか声が冷たく刺々しく感じるのは、気のせいかな。
蓮は「いえ」とかぶりを振って、おとなしく答えた。
「ここのところよく来店されるお客様ですけど。えっと……なにか怒ってます？」
「怒ってないよ」
とてもそうは見えない……正直、ちょっと怖い。
喉元まで出かかった言葉を呑み込んで、蓮はさりげなくこの場を離れようとした。
「そうですか。じゃあ、あの、品出しの続きがあるので私はこれで」
「待ちなさい、レン」
ルーエン・ディーは蓮との距離を詰めてすぐ眼の前に立った。そしてしなやかな指で蓮の額にかかった前髪を横に梳きながら、ゆっくりと微笑む。
「……見知らぬ男に触れられて平然としているとは、あなたの神経はどうかしているんじゃないのか。それともまさか、満更でもないのかな？」
蓮はルーエン・ディーの迫力に気圧され、理由もわからないままブンブンと首を振って潔白を訴えた。

「わ、私はお客様に握手を求められたから応じただけで、他意はありません」
「そう。それで？　もしまた同じことを求められたら、どうするの？」
「……えっと」
「どうするの？」
「て、丁重に、お断りしようかと思います……」
「結構。あなたは女性なのだから、少しは警戒心を持ちなさい。いいね？」
蓮がコクコクと頷くと、ルーエン・ディーは相好を崩し、「よしよし」と蓮の頭を撫でた。
「さて、と」
ルーエン・ディーは襟を正し、軽く羽織った黒のロングコートの裾を翻す。
「では僕はひと足先に帰宅するとしよう。夕食の用意を整えて待っているから、寄り道せずに早く帰っておいで」
立ち読み客の好奇心に溢れた視線を集めつつ、ルーエン・ディーは店を出て行った。
レジに立ち、二人の会話を黙って聞いていたミカジがコロコロと笑う。
「いやあねぇ。ルーエン・ディーってば、思春期の娘を持った心配性のお父さんみたい」
「……心配？　怒っていたわけじゃなくて？」
「怒っているふうには見えなかったわよ」
「そ、そうですか。ルーエン・ディー、心配してくれたんだ……」
怖がって悪いことしたなあ、と蓮は勘違いしたことを反省した。

ルーエン・ディーはもう一人の恩人だ。
彼がいなければおそらく路頭に迷っていただろう。言葉も通じない異世界で右も左もわからない蓮を拾い、衣食住を世話してくれた。本屋という仕事を与えてくれ、いままでやってこられたのもすべて彼のおかげなのだ。
ミカジが「そういえば」と、ふと思いついたという口調で続けた。
「この間、偶然ルーエン・ディーが読んでいた本のタイトルを見ちゃったんだけど、それがおかしいのよ。『正しいお付き合いのマナー・女性編』ですって！　笑っちゃうわね」
「えええっ。ルーエン・ディー、お付き合いしてる女性がいるんですか!?」
素で素っ頓狂な声を上げて驚いてしまった。
確かに、ルーエン・ディーのような魅力的な男性なら、すてきな恋人の一人や二人はいてもおかしくない。いやむしろ、いない方がおかしい。
蓮は面食らった顔で前髪を掻き上げる。
「それは知らなかったな……」
するとミカジがいきなり「ぶーっ」と腹を抱えて大笑いした。
「あっはっはっはっはっは！　やーだぁ、そうくるわけ？　あはは、レンってば面白いわねー。その天然ボケ！　絶妙に着眼点がずれてて突っ込む気にもならないけど、真面目に曲がっているなんて最高！　面白すぎるわ。ほんと、あなたと話していると退屈しなくて好きよ」
「……どうも」

褒められている気はまったくしないが、一応そう言っておく。
「でも、あなたに本気になったら苦労しそう」
意味深な微笑みを浮かべるミカジの意図が読めなくて、蓮は戸惑った。
「本気に……？」
「好きになったらってこと」
「そんな奇特な人いませんよ」
自慢じゃないが、男性にモテたことなど過去一度もない。
恥を忍んでそう打ち明けた蓮の鼻のてっぺんをミカジがツン、と突いて笑った。
「いままでいなくても、これからもいないとは限らないでしょう？　レンは自己評価が低すぎるわ。だからたぶん、ルーエン・ディーも余計に心配なんじゃないかしらね？」
蓮がなんと言い返せばいいのかわからなくて困っていると、ミカジはさらりと流した。
「おしゃべりはおしまい。はい、軍手」
「……えーと」
「いいのよ、深いことは考えなくて。レンはそのちょっと鈍いところがかわいいんだから」
蓮はミカジから無言で軍手を受け取った。
なんだろう、ミカジから漂う、この「仕方のない子」感は。しかも「鈍い」とまで言われた。
胸がモヤモヤしたが、「まあ、いいか」と思い直す。とにかくいまは仕事中なのだし、ミカジもすでに接客に移っている。無駄口ばかり叩いていては仕事がはかどらない。

「集中しよう、集中」
蓮は掌にパシッと拳を打ち込んで気合を入れ直し、品出しに戻った。

そうこうしていると閉店時間となり、つつがなく本日の営業を終えた。
「さ、とっとと帰りましょうか」
戸締りと侵入防止の魔法障壁を張り巡らせたジャストワが意気揚々と言った。
「おいしいお酒とおつまみ、ごちそうが待ってますよー」
今夜は『白騎士の本屋さん』開店二ヶ月を祝って、スタッフ全員揃っての夕食会がルーエン・ディーの家で開かれる。蓮の提案に、皆が快くのってくれたのだ。
蓮はウキウキしながら言った。
「楽しみです」
そう、朝からとても楽しみにしていたのだ。ごちそうもさることながら、蓮が夕食会を提案した本当の理由は別にある。今日の一番の目的は、ズバリ『皆と親睦を深めること！』だ。
考えてみれば、こんなに毎日一緒にいるのに互いのことについてはほとんどなにも知らない。
今更だが、その事実を少し寂しく思ったのだ。別にプライベートを根掘り葉掘り聞こうというわけではないけれど、もっと仲よくなりたいし、打ち解けた話もしてみたいと思う。
蓮は心の声をぼそっと漏らした。
「それにルーエン・ディーにはぜひとも訊きたいことがあるし……」

機を見て話しかけよう。
「ふふふ……まずは飲ませて酔わせて口を軽くしてから近づいて……」
無意識のうちにブツブツと独り言を漏らしていたらしい。
余程悪いことを考えている顔に見えたのか、隣を歩いていたリヒトに真顔で諫められた。
「もし女を口説くつもりなら、酔い潰すのはよせ。犯罪だぞ」
違う！

第一章　本屋さんの日常とおかしな客人

一

「では、『白騎士の本屋さん』開店二ヶ月を祝いまして、かんぱーい！」
蓮がグラスを掲げて言うと、仲間たちがあとに続く。
「乾杯！」
夕食は旬の魚や野菜を使った実の季の味覚満載のごちそうで、嬉しいことに蓮の舌にもよく合った。異世界の味は地球のとはちょっと違い、見栄えはよくても味は残念な結果に終わることが多い。だが、今回はどの料理も素材を生かしたシンプルな味付けで、素直に「おいしい！」と称賛できた。
飲み物のグラスが空になると同時に老執事が近づいてきて、蓮に訊ねた。
「レン様、お飲み物をお注ぎいたしましょうか？」
「ありがとうございます。お願いします」
「かしこまりました。ワインでよろしいですか？」
蓮が答えるより先に、ルーエン・ディーがやや強い語調で止める。
「待ちなさい、レン。顔が赤くなっている。ワインはやめて果汁にした方が無難だよ」

「え。そんなに赤いですか？」
斜め向かいの席でミカジが色っぽいしぐさで頬を指差し、悪戯っぽく笑う。
「赤いわよ？　もう真っ赤。とってもかわいいけど酔い潰れるには早いから、おとなしくルーエン・ディーの忠告を聞いた方がよさそうね」
リヒトが肉を頬張ろうとしていた手を止めて、ミカジを睨んだ。
「男がかわいいわけないだろうが！　ったく、気色悪いこと言うなよな。せっかくの極上肉がまずくな――痛てえっ。誰だ、俺の脛を蹴った奴は!?」
ジャストワが優雅な手つきでサラダを口に運ぶ。
「すみませんね、脚が長いものでちょっと滑りました」
「す、滑った？　いや、まあ、滑ったなら仕方ない、のか？」
素直に謝られては怒るに怒れず、リヒトは疑問符を飛ばしながら、食事に戻る。
ジャストワは忌々しげに声を尖らせた。
「……鈍感もここまでくるといっそ清々しいというか、問答無用で成敗したくなるというか、どうしてくれましょうかね」
ミカジが澄まし顔で指摘する。
「本音がダダ漏れしてるわよ」
「あなたこそ眼から殺気が漏れてますよ」
「あらやだ。うふふ」

どちらも怖い。
蓮はジャストワとミカジからリヒトに対する怒気をひしひしと感じた。
肝心のリヒトは空気の読めない性質らしく、せっせと「うまい。おかわり」と極厚ステーキを堪能している。ある意味とっても幸せだ。
和気あいあい（？）とした食事のあとは全員で談話室に移動した。
蓮は皆に飲み物を注いでまわった。ついでに、ルーエン・ディーの足元で悠然と寝そべる白銀の獣ハクとザクに、好物のカエルまんじゅうを与える。
「じょー」
催促のダミ声を上げたのは雷竜のジョーだ。
元は〈白騎士〉の竜だったが、彼が亡くなってからはある絵本の中に閉じ込められていた。蓮が本に触れて名前を呼んだことで、絵本から抜け出すことができたのだ。
いまでは『白騎士の本屋さん』の看板竜となっている。
「じょ」
銀灰色の竜は、なぜか蓮によく懐いていた。身体の大きさを自在に変えられる能力を生かし、昼間は本屋の軒先に、夜は蓮の部屋にと、たいてい近くにいる。
「はいはい、ちゃんとおまえにもあげるから。ほら、あーんして」
「じょ！」
ジョーがカパッと口を開ける。素直でかわいい。

しばし歓談したあと、蓮はいったん席を外し、自分の部屋からあらかじめ用意していた包みと新品のカードを取ってきた。
「ゲームをしませんか」
「ゲーム？」
自分でワインのおかわりを注いでいたジャストワが小首を傾げた。
蓮は頷き、箱から出したカードデッキをさっそくシャッフルし始める。
「はい。カードゲームです。『最後の戦い』はどうですか？　この通り、勝った人には景品も用意してありますし、オプションで私の全身マッサージもつけましょう。いかがです？」
最初に誘いに応じたのはミカジだ。
「あら、面白そうね。いいじゃない、やりましょうよ。ちょうど手元にベルヒライヒのリサイタルチケットが二枚あるから、これを賭けるわ」
眼の色を変え即座に食いついたのはジャストワだ。
「ベルヒライヒ!?　そ、それは私が聴きに行きたかった公演の、すでに完売したチケット……！」
ミカジは指で摘んだチケットをひらひらさせて、ニヤリと笑う。
「欲しかったら、勝てば？　でも魔法で八百長はもちろん禁止よ」
「参戦します。はっ、勝負事に八百長なんて無粋な真似はしませんよ。賭けるものは、そうですね……私が調合した特製疲労回復薬を一瓶提供しましょう」
すると、ハクとザクにおやつを与えていたリヒトが尻上りの口笛を吹いた。

「へーえ。レンの全身マッサージに、魔術師殿お手製の疲労回復薬か。そりゃ効きそうだな」
「もちろん効きますとも。効果覿面ですよ。老若男女問わず、飲んだ人間は一瞬で体力全快、通常の一・五倍から二倍の速さで動けます。副作用もないスグレモノですよ」
「面白そうだ、試してみてもいいな。よし、のった。俺が負けたら、なんでも好きなものを奢ってやるよ」
「ルーエン・ディーは？　一人だけ不参加なんてなしですよ」
蓮が水を向けると、ルーエン・ディーは仕方なさそうに溜め息をついた。
「参加するよ」
「ありがとうございます。ところであなたが負けたら一曲歌う、というのはどうですか？」
「全身マッサージなんて嫁入り前の――え、なんだって？　いまなんて言ったんだい」
「負けたら一曲歌ってください」
「は!?」
ルーエン・ディーの眼が点になる。
「じゃ、そういうことで、始めましょうか」
「ちょっと待ちなさい。僕は歌なんて歌ったことがない――」
蓮は慌てるルーエン・ディーを余所にカードを配った。
カードは全部で四十二枚。色は白黒で四種類の柄があり、表面に一から一〇まで数字が描かれ、裏面は波模様になっている。トランプと似ているものの、ジョーカーの代わりに白いカードには白騎士、黒いカードには闇の王が一枚ずつ加えられる。遊び方は色々あるものの、どのルールもまず自軍を白か黒どちらか決めるのが基本ルールだ。
「さあ、白と黒、どちらを選びますか？」
『最後の戦い』のルールは、『ババ抜き』とほぼ一緒だ。最初にそれぞれ白か黒か選択し、同数のカードを人数分配る。一枚ずつ他者から抜き取って同じ札があれば捨て、手札が早くなくなった者が勝ち。最後に白騎士と闇の王のカードを持っている者が負け。
ただ『ババ抜き』と違うのは、最後に残ったカードの色が命運を分ける点だ。自分の選んだ色なら引き分け、反対色なら敗北。つまり、白を選んで白騎士が残ればセーフ、闇の王ならアウト。逆の場合も同じだ。
「じゃあ、私とミカジが白。ルーエン・ディー、ジャストワ、リヒトが黒ということで、さっそく始めましょうか」
先に二勝した者が勝ち、一番手札を多く残した者が負け、と決めてゲーム開始。各自手持ちのカードを扇のように広げて左回りで隣の人のカードを引いていく。
ミカジ、ルーエン・ディー、蓮、リヒト、ジャストワの順だ。
単純なルールだけに遊びやすい……はずなのに、ゲームは序盤から緊迫していた。
「……」
「……」
人間、勝負がかかると口を閉じるものらしい。

皆、だんまりだ。しかも無表情なため不気味だ。
蓮は焦った。なにもこんな沈黙の嵐を招きたかったわけではない。キャッキャウフフ、は無理でも皆でおしゃべりしながら、楽しく遊びたかったのだ。
話題、なにか話題を。なにかなにかなにか、にゃにか。あ、噛んだ。
「さ、最近読んだ本では、ほ、『星の手紙』が面白かったので、もしまだ読んでいない人がいたら、貸すので、読みたい人はいませんかー」
いきなりなんの話だ、と言わんばかりの冷たい視線の集中砲火に蓮はすでに挫けそうになる。
びびりが顔に出ていたのかもしれない。おもむろに、ルーエン・ディーが会話にのってくれた。
「……どんな内容の本？」
「れ、恋愛小説です」
リヒトが横から口を挟んだ。
「あれだろ？　船列車の事故がもとで離れ離れになった恋人同士が、十年後に再会するってやつ」
「そう、それ。リヒトも読んだんだ、どうだった？」
「ベタだな」
「ベタがいいんじゃないか！」
思わずむきになって言い返すと、隣のルーエン・ディーがクスクス笑った。
「意外だな。レンが恋愛小説を好むとは知らなかった」
ようやく張り詰めた空気が和み、蓮はホッとしながら言った。

「私は本ならなんでも読みますから。それに恋愛小説といっても感動系なので、男性が読んでも面白いと思います」
リヒトがジャストワからカードを抜きつつ、相槌を打った。
「そうだな。つまらなくはない」
「それなら僕も読んでみようか」
「ぜひ！　読んだら感想を聞かせてもらえますか？　実は次のおすすめ本のフェアは『星の手紙』を展開しようと思って、もう発注済みなんです」
「わかった。あなたがそこまですすめる本だ、期待して読むよ」
「ありがとうございます！」
するとミカジ、ジャストワ、リヒトが口々に言った。
「はいはい、そこ、二人だけで盛り上がらないでちょうだい。いま真剣勝負中なんだから。次、ルーエン・ディーの番でしょ」
「そうですよ。仕事の話もいいですけど、もっとゲームに集中してくださいよ」
「勝ちたくない奴は放っておけよ。俺は勝って、レンに全身マッサージしてもらうから」
途端、ミカジとジャストワがカッと眼を見開いた。
「ばっかじゃないの。ぜーったいに、あんたにだけは勝たせないわよ」
「同感ですね。あなたに勝ちは譲りません。私が勝った方がましです」
続けてルーエン・ディーも蓮の手札から一枚抜きながら、低い声で牽制した。

「……ミカジはともかく、ジャストワもリヒトもダメだ。勝負は僕がもらう」
蓮は遠い眼をしつつ、どうしてまた険悪なムードに逆戻りになるかなあ、と内心ひとりごちた。
「誰が勝ってもマッサージはちゃんと――」
だが、蓮が最後まで言い終えないうちに、リヒトを除いた三人の声が重なった。
「はい、却下」
「なんで!?」
納得できない蓮に、ルーエン・ディーは美しすぎる微笑みを向けた。
「次、レンの番だよ。引いて。おとなしく続けてくれないと、僕はあなたを見つめ続けるよ。それでもいいかな」
「よくないです！」
竦み上がった蓮は、慌ててリヒトの手札へ手を伸ばした。リヒトはジャストワの手札から一枚引く。次にジャストワがミカジの手札から一枚引きかけたが、その指が止まった。
ミカジは挑発的な眼つきでジャストワを見て言う。
「それ、白騎士よ。引かない方がいいんじゃなぁい？」
「私を騙すつもりですね……そんな見え透いた嘘に引っかかるとでも？　ぐわっ」
「あっはっはっは！　ばっかねぇ、まんまと引っかかったじゃないの。あんたは底が浅いのよ」
「くっ……」
悔しそうに唸るジャストワを尻目に、ミカジはルーエン・ディーから一枚引く。そしてルーエン・ディーが余裕の態度で蓮の手札の左端を抜くと、蓮は自軍である白のカードばかり減っていくことに危機感を募らせながら、リヒトの手札から次のカードを引いた。
「うわっ」
よりによって一番欲しくない闇の王のカードを引き当ててしまった。
バカ正直に呻いちゃったけど見破られたかな。……見破られただろうな。
蓮が恐々と横目で隣の席のルーエン・ディーを窺うと、ばっちり眼が合った。おまけにものすごくいい顔で微笑まれてしまった。
「もし僕が勝ったら、あなたには盛装してもらおうかな。もちろん僕の見立てで」
「は!?」
盛装!?　ドレスアップってことか!?
顔から血の気が引いた蓮を見て、ルーエン・ディーがクスリと笑う。やられた。歌を歌わせようとしたことへの意趣返しか。これはなにがなんでも勝たないとルーエン・ディーに遊ばれてしまう。
ミカジはけらけら笑いながら空のグラスを持ち上げた。
「あはは。楽しくなってきたわねー。飲みたくなっちゃった、ジャストワ、おかわりちょうだい」
「嫌ですよ。自分で注いでください」
とかなんとか言いつつも、ジャストワはワインを取りに行く。
この会話を聞いていたリヒトは、不思議そうに首を捻っていた。
「レンをわざわざ盛装させてなにが楽しいんだ？」

もっともだ、と蓮はしかめ面で頷いた。
「私もそう思う。リヒト、本気出して遠慮なくルーエン・ディーを止めてくれ」
蓮が親指を傾けてルーエン・ディーを指すと、自分が呼ばれていると勘違いしたのか、部屋の中を暇そうにうろついていたジョーが傍に寄ってきた。
「じょー？」
「重い！　ジョー、頭の上にのるな！」
「じょ」
ジョーはまったく言うことを聞かない。仲間外れにされているのが寂しいのか、いくら言っても執拗にまとわりついて離れないので、蓮は退かすことを諦め肩に移らせた。
「そこでおとなしくしてなさい」
「じょ」
応援も頼むべきだったのかもしれない。蓮に邪険にされたと感じたのか、少し拗ね顔だ。
ルーエン・ディーは蓮より一枚上手で、ちゃんと敬意を払ってジョーに話しかけた。
「賢いジョー、僕のために一枚レンのカードを引いてくれないか。闇の王以外だよ、わかるね？」
頼りにされたのが嬉しかったようで、ジョーがルーエン・ディーに応える。
「じょ！」
「あっ、こら裏切り者！　どうせ選ぶなら闇の王を持っていけ！」
「じょじょじょーん」

「おまえ、いま『知らないよー』ってツンとしただろう⁉」
「……」
「知らんふりか‼」
ジョーの潜在能力を見抜けなかった蓮は痛い目をみた。最後まで闇の王のカードが手元に残ったため、一回戦は泣く泣く敗北したのだ。次は絶対に負けないと蓮は闘志を燃やす。
それから二回戦、三回戦と続けた。更に回を追うごとに白熱し、迎えた第六戦。
ここまでの成績は全員が一勝し、五分五分の戦いだ。次に勝てば勝者になれるとあって、誰もが手札を一枚引くのにも相手の顔色や眼の動きを読んで慎重になっている。冷たい腹の探り合いだ。
これで本当に親睦が深まっているのかなあ、と危ぶんだとき、蓮ははたと今夜のもう一つの目的を思い出した。
「そうだ、そういえば私、ルーエン・ディーに訊きたいことがあったんです」
「……訊きたいこと？」
椅子に悠然と腰かけ、グラスを傾けるルーエン・ディーはたいそう絵になる。相当量のワインを飲んでいるはずなのに、まったく酔っている気配がない。
「なに、あらたまった話？」
「えっと、そこまでではないんですが」
蓮は言い淀んだ。あらたまってはいないけど、面と向かって切り出すには遅すぎるような気もする。

「あの……」
「ためらわなくてもいい。僕に答えられることなら、なんでも答えるよ。どうぞ？」
穏やかな声で先を促されて、蓮はおずおずと口を開いた。
「……どうしてあなたがこの国の王だと、私に教えてくれなかったんですか？」
「その必要性を感じなかったから」
ルーエン・ディーの答えはあっさりしたものだった。
「でも一言くらいあってもよさそうなのに」
「どうして？」
ルーエン・ディーが眼を細めてじっと蓮を見つめた。
「僕が王だと、なにかが変わる？」
「別に、そういうわけでは……」
ないけれど、こんな重要なことを知らされていなかったという事実がショックだったのだ。皆が知っていることを自分だけが知らないなんて、なんだか仲間外れみたいで……寂しくて悲しい。
顔を俯かせる蓮の顎に、ルーエン・ディーの指が伸びて顔を持ち上げられた。
「レン、僕を見て……って、なんだい、そのむくれた顔は」
「顔面筋肉痛です」
「ぶはっ。すげぇブサイク」
遠慮なく笑ったリヒトを蓮は無言で睨んだ。

ルーエン・ディーは蓮の言葉をまともに受け取り、「痛いの？」と椅子から身を乗り出して、蓮の顔を丁寧に揉みほぐし始める。
予想もしなかったルーエン・ディーの行動に、蓮はびっくりして石のように固まった。
そんな蓮に、ルーエン・ディーが優しく微笑む。
「……僕が王だろうと王でなかろうと、あなたと僕の関係は変わらないよ」
ルーエン・ディーの漠然とした釈明を聞き眉をひそめたジャストワが小声でぼやく。
「別に隠さずとも、正直に説明すればいいでしょう。〈白騎士〉として不十分な記憶と力しかないレンに、王である自分との因縁を打ち明けるのは時期尚早と判断したからだと。それに――」
王との因縁？
蓮が疑問に思うと同時にルーエン・ディーが強い口調で遮った。
「ジャストワ、余計な口を挟むな」
ルーエン・ディーがジャストワを冷たく一瞥する。ジャストワは渋々と口を閉じた。
蓮は二人の会話を聞いて考えた。
〈白騎士〉とはいまは亡き救国の英雄だ。
現在蓮が持っている〈白騎士の書〉には、〈白騎士〉の力が封じられているという。
はじめて開いたときはなにも書かれていなかったが、蓮がおまじないを唱えたことで、ページが文字で埋まったのだ。
蓮はいままでに二つのおまじないを唱えた。

〈大切なものを取り戻すおまじない〉と、〈前世の記憶を取り戻すおまじない〉だ。
前者で竜のジョーを呼び戻せたものの、後者の成果はいま一つ。それは『夢の中で白いワンピースを着た少女の名乗った名前を唱えたところ、その名前がおまじないだった』というものだが、どうしてそんな夢を見たのかわかっていない。これが〈白騎士〉の前世の記憶とやらなのだろうか。
だが、既視感（デジャヴ）のような残像が脳裡（のうり）をちらつくことはあっても、はっきりと前世の記憶だと言い切るほどではないのだ。
とはいえ、〈白騎士の書〉にはどちらのおまじないも、しっかり記録されている。
つまり、蓮が憶えている他のおまじないも〈白騎士〉の力を持っている可能性があるということだ。確認のためには実証するのが一番なのだけれど……腰が引けていまだに挑戦できずにいる。
――もし空白のページが全部埋まったら、どうなるんだろう？
――〈白騎士の書〉が元に戻ったら、なにが変わるのだろうか？
知りたいような、知りたくないような。
疑問は尽きないけれど、蓮は尻込みしていた。
深く追及したくない……なんだか自分じゃないものになるような気がして怖いのだ。
その一方で、恐れずに試してみるべきだと囁（ささや）く自分もいる。試してみて、もしおまじないが〈白騎士〉の言葉の力だったら、なにかの役に立つこともあるかもしれないと。
蓮がグダグダ悩んだ葛藤の末、決めたこと。
――おまじないを使うような機会があったら、そのときに考えよう。

蓮はルーエン・ディーを見つめ返して言った。
「〈白騎士〉として不十分な記憶と力しかない――それは事実ですから、それが理由で私の知らない事情があっても仕方ないのかなと思います。王との……あなたとの因縁がなんなのか気になりますけど、いまは訊（き）きません。ただ――」
蓮は気懸（きが）かりを口にした。
「一国の王に対してあまりにも馴れ馴れしくしてしまっているような……って、ルーエン・ディー、なんで笑うんですか」
ルーエン・ディーがいかにもおかしそうに笑っている。
「今更だね」
「そうかもしれませんが……だったら、その……いままで通りでいいということですか？」
ルーエン・ディーの秀麗な顔に喜色が浮かんだ。
「もちろん。身近な人に急にかしこまった態度を取られたら、僕の方が居心地悪い」
「そんなものですか」
「そんなものさ。あなただって一つ屋根の下で暮らす人が突然よそよそしくなったら困るだろう？」
「う。それは確かに……」
「同じだよ。僕もあなたにいきなり他人行儀になられたら、どうしていいかわからない」
「どうしていいかわからない……ルーエン王（ディー）ともあろう人が、ですか」
「そうだよ。だから、普通でいい。それが一番嬉しい」

「……わかりました。じゃあ、えーと、普通にします」
「うん、そうしてくれ」
そこまで喋って、蓮はハッと我に返った。いつの間にかルーエン・ディーの大きな手が蓮の両頬を包んでいて、顔を覗き込まれていたのだ。
「てててて」
動揺して焦るあまり、言葉が出ない。
「『てててて』？」
「手を放してください！」
「……でも顔面筋肉痛は治ったの？　撫でたら痛みがひくかと思ったのだけれど」
「余計にひどくなりそうです！」
「どうして。撫で方が足りなかったかな……あれ？　レン、顔が赤いよ」
誰のせいだ！
蓮はカードを持っていない方の手でルーエン・ディーの厚い胸板を押した。顔が燃えるように熱い。それほど男性に免疫のない身としては心臓に悪すぎるスキンシップだ。
はっきり言って、こんな親切はありがた迷惑だ!!　と心の中で蓮は叫んだのだった。

最終的にゲームはルーエン・ディーが勝者となった。
蓮は一番カードを多く残したため最下位で口惜しい思いをした。ルーエン・ディーに一曲歌って

立ち読みサンプルはここまで

もらうという野望も潰えたし、『親睦を深める！』という目論みも成功したとは言い難い。けれど、皆とわいわい楽しく騒げたのはよかった。それだけは満足だ。
ルーエン・ディーには景品を進呈したものの、全身マッサージのオプションは「気持ちだけもらっておくよ」と丁重に断られてしまった。それを横で聞いていたリヒトが「じゃあ俺が代わりに」と言ったら、ジャストワとミカジに左右からどつかれて悶絶していた。

二

アウラ・エルの国の季節は、三ヶ月毎に花の季、水の季、緑の季、実の季、氷の季と移り変わる。花や樹木が鮮やかに様変わりする季節だ。いまは実の季で、収穫時期ともあって食べ物が豊かな時期である。
王権による支配の完全な王制で、十五小国それぞれに王がいて自治権を持っている。だが有事の際は、統一王であるルーエン・ディーに全権が委ねられる仕組みらしい。
この十五の国々は十五色の名前で呼び分けられ、ここ青緑の一の国に首都パウラ・フォウがある。上下水道と道路が整備され、堅固な建造物が連なる市街は活気がある。物流も盛んらしく、とても賑やかだ。エスカ・アルダ王宮を中心に、東に学校区、西に工業・商業区、南に住宅区、北に行政区と区別され、人々の住居は仕事に応じて決められていた。